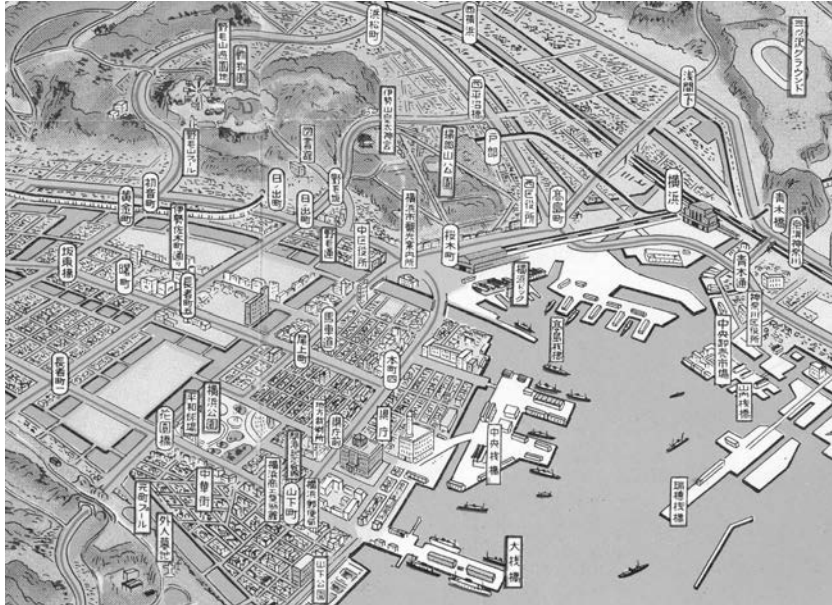


市史通信

【目次】

- 横浜観光と野毛山
～遊覧バスのルートによる考察
- 昭和初期、都筑郡
田奈村の農業生産
～「経済更生基本調査書」から～
- ボンゲー洋装店のアルバムから
- 閲覧資料紹介
『愛称道路』横浜市道路局
1978(昭和53)年、84(同59)年
- 市史資料室たより



「横浜市観光鳥瞰図」(部分)

「港都ココハマ」横浜市貿易観光課・横浜市観光協会(1952年)挿図、横浜市史資料室所蔵

第49号

【発行日】2024年3月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 sisiryoyou@ml.city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryoyou/>

横浜観光と野毛山 ～遊覧バスのルート による考察

横浜市営バスの「あかいくつ」号は、横浜の人気観光スポットを巡る周遊バスである。桜木町駅前を発着場所にして、赤レンガ倉庫、中華街、元町、港の見える丘公園、マリントワー、山下公園、大さん橋客船ターミナルなどを巡る。

ただし、「あかいくつ」号は、運行の目的が異なるものの、一般の路線バスと同じ乗合自動車である。添乗員とともに所定の順路で市内を遊覧する、貸切り式の定期観光バスは、横浜市交通局では一九九九(平成一一)年まで運行されていた。一九九〇年代の市営定期観光バスの市内遊覧コースは、横浜駅東口が発着場所となり、みなとみらい21地区やランドマーク、ベイブリッジやスカイウォーク、三溪園が加わる他は、「あかいくつ」号とほぼ変わらない。

いずれにせよ、本稿で着目したいのは、これらのバスが巡る場所についてである。

*

そもそも横浜市営の定期観光バスが誕生したのは、一九三五(昭和一〇)年一二月である。「横浜市遊覧バス」の名称で、交通局の前身の電気局が営業を開始した。そのきっかけとなったのは、同年の春に山下公園にて開催され

た復興記念横浜大博覧会(横浜市主催)に際し、来場者の市内観光を目的に運行された遊覧バスだった。

【図一】は横浜市遊覧バスのパンフレットに掲載された路線図である。所要時間は六時間だった。後年に編集された『横浜市電気局事業誌』(一九四〇年)には、このコースについて以下のような説明が記されている。事業の趣旨がよくわかるので、全文を掲載する。

横浜駅又は桜木町駅前を出発し第一に旅程の平安を祈る為伊勢山皇大神宮に参拝し—維新の開港論の立役者井伊掃部頭の銅像のある掃部山公園を訪れ—和洋両様式の野毛山公園に遊び横浜市を鳥瞰し—震災記念館を見学—商工奨励館に至り—本邦最初の公園として名ある横浜公園を散策し—山手外人街に出で緑の芝生に



図1 「横浜市遊覧自動車路線図」

「横浜名所案内」横浜市電気局(1935年頃)挿図、個人所蔵

映ゆる白き大理石立つ外人墓地を抜け—更に我が国最初の競馬場たる根岸レース・クラブを訪ね—これより不動坂を下り海を眺めつ、ドライブし英照皇太后の行啓に栄ある杉田梅林を探訪し—屏風ヶ浦の称ある風光明媚な海辺を快走しつ、—本牧三溪園に日本古来の和式公園を知り—八聖殿を参観し—更に天下の臨海山下公園を周遊—巨船の連泊する大棧橋を見学—万国橋を経て弘明寺観音に詣で—更に児童遊園地に遊び—開港に名も高き本覚寺に参詣し—史蹟に著名な生麦事件ノ碑を右に見て—禅宗大本山たる総持寺に詣り—京浜間の遊園地花月園を最後とし発駅に帰着するのである。

当時の横浜観光が、近年のそれと大きく違うのは、後者が港に周遊コースを絞ったものであるのに対し、市域全般の地理と歴史を広く見ることが目的だった点であろう（*当時の市域は現在の鶴見・神奈川・西・中・南・保土ヶ谷・磯子区など）。

市営遊覧バスの運行は戦争の影響で二年後に休止されるが、戦後の一九五三（昭和二八）年に復活する。【図二】は当時、交通局が発行した観光案内に掲載された、その路線図である。經由地を周遊する順番に抜き出すと、①横浜駅②生麦事件の碑③総持寺・花月園競輪場④市役所⑤野毛山動物園⑥野毛山遊園地⑦神奈川県庁⑧開港記念会館⑨



図2 「定期市内観光バス御案内図」

「横浜YOKOHAMA」 横浜市交通局（1953年）挿図、横浜市史資料室所蔵

横浜平和球場・中華街⑩外人墓地⑪旧根岸競馬場⑫三溪園⑬八聖殿⑭ホテルニューグランド・山下公園⑮〔大棧橋〕⑯生糸検査場⑰桜木町駅となる。つまり、横浜駅前からまず鶴見方面へ向かい、横浜駅前に戻ると野毛山を経て関内に抜け、中華街から山手の外国人墓地、根岸の競馬場跡、本牧の三溪園と八聖殿を巡り、山下公園、大棧橋を経て、桜木町駅に戻って来る。

この印刷物には「市内観光」と題して、基本的な趣旨を次のように説明している。

生麦事件碑に旧幕時代を追想し、山手に外人墓地を訪ねてエキゾチックな叙情に浸り、あやしきまでに明媚な三溪園は暫し散策して国宝三重宝塔などを鑑賞、現代日本の代表的通商貿易港の大棧橋に出船入船のにぎわいを満喫するなど、三十分三十分余る全コースを優秀な口

マンスカーでガイドガールが御案内申上げます。

戦前と比べてコースが逆回りとなった他、杉田梅林や弘明寺観音、児童遊園地（現・保土ヶ谷区）などが外されて規模が縮小された。とはいえ、戦前の旧市域全般の地理と歴史を見るといふ姿勢は変わっていない（*市域は戦中に現在と同じに拡張）。

そして、一九六〇（昭和三五）年頃に経済局貿易観光課が発行した観光案内パンフレット「ヨコハマ YOKOHAMA」では、市営の定期遊覧バスのコースが、「横浜駅→生麦事件碑→鶴見総持寺→京浜第二国道→横浜駅→掃部山公園→野毛山遊園地→横浜公園→中華街→外人墓地→旧根岸競馬場跡→三溪園→八聖殿→気象台→山下公園→マリントワー→氷川丸→大棧橋→横浜港内遊覧船一周→高島橋→横浜駅」と明記されている（筆者波線）。

港内遊覧船がコースに組み込まれ、鶴見方面（波線部）は選択できるようなった。それに応じて所要時間は約四時間半もしくは約三時間半となる。神奈川県庁や生糸検査所が抜けたが、コースは【図二】と基本的に変わっていない。この印刷物には路線図はないが、市域全体の広域を取り上げた市内観光案内図が掲載されている（【図三】）。

さて、注目したいのは、当室の所在する野毛山地区（西区老松町）である。

戦前から公園として遊覧コースに組み込まれ、一九四九（昭和二四）年には日本貿易博覧会（神奈川県・横浜市主催）の会場となった。一九五一（昭和二六）年には野毛山遊園地・動物園が開園した。巻頭の鳥瞰図はその頃に発行されたものである（*作者は吉田初三郎であることに間違いはないが、明記されていない）。大きな観覧車と象の姿の描かれた野毛山がひととき強調して描かれているように思うのは、筆者だけだろうか。

また、【図三】でも掃部山地区（西区紅葉ヶ丘）と連続しながら、関内地区に匹敵するほどにぎやかなイラストが配置されている。この印刷物を含め、昭和三〇年代の観光案内では野毛山を次の通り説明している。

野毛山遊園地、動物園市街から港を一望出来る野毛山は「港の見える丘」として親しまれるが、頂上から中腹にかけて、遊園地と動物園が施設を豊かに備えている。

「ヨコハマ観光地図」横浜市経済局 貿易観光課

野毛山遊園地（西区老松町）市電
野毛山遊園地前、市バス野毛山動物園前 市街と港を一望できる野毛山は、頂上から中部25平方方に遊園地と動物園とがあり、各種の珍しい動物と、いろいろな遊技物がある。子供の楽天地を形成している。

又、野毛山公園一帯は桜の名所で春は花見で賑い、附近には市営プールと市立図書館がある。

「ヨコハマ YOKOHAMA」横浜市

経済局貿易観光課

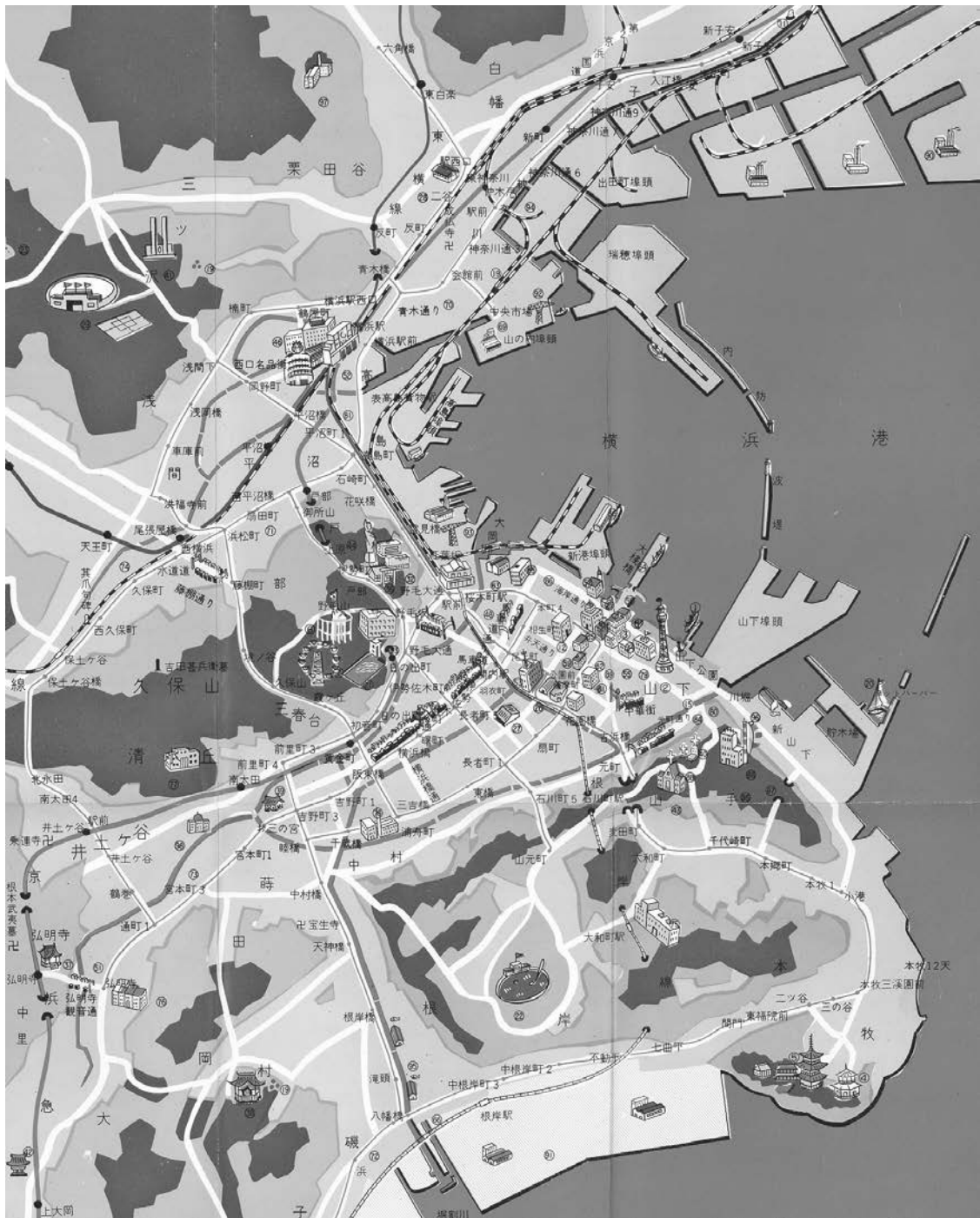


図3 昭和30年代の横浜市内の観光案内図(部分)

「ヨコハマYOKOHAMA」横浜市経済局貿易観光課(1960年頃)挿図 横浜市史資料室所蔵

野毛山は市内遊覧コースにおいて、行楽と眺望の期待された、目玉となる場所だったことが推測される。

しかし、昭和四〇年代には事情が変わるようである。【図四】は一九六五(昭和四〇)年に作成された定期遊覧バス

のチラシである。磯子区の汐見台(団地)までコースが延び、また、港の見える丘公園(中区山手町)が新たな遊覧場所に加わっている。

一方、野毛山は外されたようである(*以後、定期観光バスの遊覧コースに



図4 「海と陸を結ぶ遊覧コース!」(チラシ) 横浜市交通局(1965年)、横浜都市発展記念館所蔵

入ることはない)。遊園地が閉鎖され、動物園も珍しい施設でなくなったこともあるだろうが、港や市街の眺望場所としての地位を山手地区に譲ったことが大きな理由だろうか。

新たに加わった「団地」はすぐにコースから外れ、鶴見方面も一九七七(昭和五二)年に外れてしまう。遊覧バスのルートから見た場合の横浜観光は、地域の地理と歴史を知ることから、港の周遊という性格が強くなっていく。そんな流れの中で、野毛山地区は、高層マンション等によって実際に眺望が失われるのは一九九〇年代になってからだが、図書館に象徴されるように、観光客よりも市民が日常的に訪れる場所

に変わっていくようである。(岡田直)

昭和初期、都筑郡 田奈村の農業生産

「経済更生基本調査書」から

田奈村（現青葉区・緑区）は、都筑郡恩田村・奈良村・長津田村が合併し一八八九（明治二二）年に設立され一九三九（昭和一四）年に横浜市と合併した。現在の横浜市北部、川崎市や町田市に接した地域である。この田奈村の昭和初期の農業について、国の政策に基づき一九三二年に始められた神奈川県補助事業「農山村経済更生事業」における指定村の基礎資料から紹介する。

田奈村は、一九三五（昭和一〇）年に経済更生村に指定され経済更生基本調査書が作成された。

当時の田奈村は、昭和恐慌による農村不況の影響から回復していなかった。同資料後半の「計画書」冒頭には「本村ニ於ケル農家ハ元來養蚕収入ヲ以テ生計費ノ大部分ニ充ツル者多シ為メニ、昭和五年來襲ヒ来リタル糸価ノ惨落、加フルニ之レニ附随セル各種農産物価ノ暴落ハ（略）村全面的ニ見ルニ甚ダシク収支ノ均衡ヲ欠クノ状況ニシテ、農業外ノ収入ヲ除外セシカ其財政全ク危機ニ瀕ス」とあり、養蚕主体の農家経済は大きな打撃を受けていた。

作成された「昭和十年度指定経済更生基本調査書」には、地図・沿革・地勢・気候・交通・人口戸数職業・土地・労

力・農具・共同設備・収支状況・雑の目次で経済更生計画を立案する際の基礎データを収録し、末尾の「田奈村経済更生計画書」の基礎となった。なお数値の年代が書かれていないが、ほぼ前年の一九三四年と推定される。

田奈村の概要

田奈村は、村中央部に恩田川（鶴見川上流）が流れ、同様に省線横浜線が走り長津田駅が設置されており、道路では東京方面から「南青山往還」（大街道）、長津田駅近辺から北西に「長津田停車場日野線」、また中里村方面から恩田川流域を東西に通る東京府南多摩郡南村への「川崎町田線」の県道（府県道）が通っていた。近隣各地への所要時間は、鉄道では長津田駅から横浜には三〇分、厚木町（省線・小田急）三五分、八王子市四〇分、東京五五分等であり、道路では横浜中央市場（五里）には自動車で一時間、東京神田市場（九

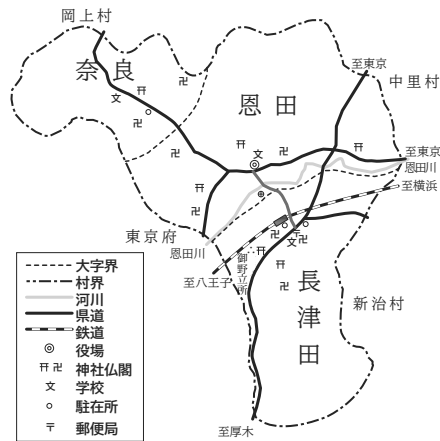


図1 田奈村略図

元図：「経済更生基本調査書」。

里）同二時間、近隣の川向青物市場（二里）には牛車で一時間三〇分であった。人口（一九三四年）は、現住戸数七三八戸、男二三八三人、女二二八八人、計四六七一人で一〇年前と比較すると七〇戸・四三七人の増加であった。職業別戸数では六五パーセントが農業であったが、工業四パーセント・商業一二パーセント・その他一九パーセントあり、恐らくは長津田駅近辺を中心に農業以外の戸数が多かったものと思われる。もともとこの内の二五パーセントは農業兼業であった。専業合計の農業戸数は五四五戸となり、兼業率は一二パーセントと都筑郡平均より数パーセント低い程度であった。

土地所有と経営

田奈村の私有・公有の地目別面積をみると、約五割が山林、田は一二パーセント、畑は三四パーセント、宅地は四パーセント弱と、村の半分は山林が占め耕地では畑勝ちで、田は恩田川の流域と谷戸田であった。

農業の自作小作の別では、小作四六戸・自作三五四・自作五六・自作地主八九となり自作小作が六五パーセントと多く、この一〇年前（一九二九年）も自作小作が二割ぐらい増加している。所有規模・耕作規模を見ると（表1）、田畑所有者は四五五戸あり、計算上、専業農家の九〇戸は田畑無所有であり、また専業の二五戸が無所有となる。山

表1 土地所有面積別・耕作面積別戸数

面積区分	田畑山林所有戸数		田畑耕作戸数
	田畑	山林	
五反歩未満	214	192	68
五反歩以上	69	57	148
一町歩以上	85	46	216
二町歩以上	37	26	108
三町歩以上	45	35	5
十町歩以上	5	10	
五十町歩以上			
計	455	366	545

林の所有者はもつと少なく三六六戸で、やはり五反歩未満が半数であった。耕作規模では一町歩以上が一番多く四割となり、ついで五反歩以上、二町歩以上となり、所有との差は小作地で埋められた。五反歩未満は六八戸とほぼ兼業農家数と同じなので、この層は大多数が兼業と思われる。この所有と耕作の傾向は一九二〇年と基本的に変わらないが、二〇年と比較すると、五反歩未満と五反歩以上の耕作戸数が増加し、二町歩以上の耕作戸数が減少している（『神奈川県都筑郡統計書』）。

地目・種類別自作別経営面積

田は一六七町一反あり、うち自作が八〇町二反（四八パーセント）、小作が八六町九反（五二パーセント）とほぼ五割ずつとなっていた。

畑は自作が若干上まわり二四二町程（五三・八パーセント）、小作が二〇七町（四六・二パーセント）であった。この

表2 田奈村の農業生産

種類		栽培反別 (反)	收穫高	反当収量	自家消費高	販売数量	販売価格 (円)
普通作物	甘藷	675	236,250	350	84,250	152,000	10,640
	水稻	1,565	2,974	1.9	2,198	776	18,096
	陸稲	776	466	6	313	153	3,362
	大麦	555	1,332	24	810	522	4,630
	小麦	1,637	2,456	15	856	1,600	23,000
	稗麦	476	952	20	648	304	3,800
小計							63,528
蔬菜	茄子	50	10,000	200	8,000	2,000	240
	胡瓜	45	6,750	150	4,150	2,600	520
	大根	157	40,035	255	28,520	11,515	575
	馬鈴薯	71	19,880	280	11,928	7,953	556
	里芋	171	20,520	120	12,312	8,208	1,231
	豌豆・蚕豆	45	405	0.9	194	211	3,376
	西瓜	25	17,500	700	1,200	16,300	1,630
	苺	30	3,000	100		3,000	3,000
小計							11,128
果樹	柿	6,500	104,000	16	24,000	80,000	19,200
	栗	48	5,760	120	1,210	4,550	1,592
	梅	200	950	4.75	380	570	142
小計							20,934
工芸作物	菜種	87	52	0.6	8	44	572
小計							572
桑園		1,567	495,747	貫	494,167	1,580	789
養蚕	種別	養蚕戸数	掃立瓦数	収繭高(貫)	自家(貫)	販売(貫)	
	春蚕	418	24,247	g	836	11,750	43,775
	初秋蚕	479	14,750	g		3,975	12,770
	晩秋蚕	388	12,050	g	420	2,556	8,435
計				19,537	1,256	18,281	64,930
畜産				生産物種類			
	牛	75	70	戸	肉用	5	247
	豚	500	465	戸	肉用・子豚	400	11,200
計		939	1080	羽	30頭	862	1,120
計					77		12,567
林産	種別	反別	数量				
	松		650	石	28	622	2,587
	杉		315	石	107	208	1,040
	筍		5,000	貫	1,500	3,500	875
	木炭	14.0	38,400	貫	11,250	27,150	5,430
	竹材	0.4	560	束	110	450	135
飾竹	0.5	600			600	180	
計							10,247
副業	藁細工						1,500
	芝	10.0	6,000	売坪		6,000	750
	茶	5.2	1,040	貫	958	82	328
計							2,578
合計							186,484

注：省略した備考欄には、「柿」の項に「隔年二付多額ヲ記入ス」、「桑園」項に「春三七七五八〇 秋一一八一六七」とある。単位は、それぞれの欄に付された単位が優先する。

内訳は普通畑二六六町八反(自五三・一パーセント)、小四六・九パーセント)、桑園一五六町七反(自五二・六、小四七・四)、果樹園二〇町(自七五・〇、小二五・〇)などであった。都筑郡全体

では自作が四六パーセント、小作が五四パーセントと合計・田畑共に小作地の方が割合が高く、その中で畑の自作割合が高いことは田奈村の特徴となっている。次に林野竹林についてみると、林野は用材林が二六一町、薪炭林三九一町五反で約六割が薪炭林であった。竹林は一二町弱で孟宗竹林八町一反、苦竹林二町七反などで、孟宗竹林のうち二町三反は小作地であった。

農業等の生産状況

次に田畑・養蚕・畜産・林野竹林の産物等、田奈村の生産について見ていこう。表2は「収支状況」の「(-)収入」のうち「(イ)生産販売価格」を示す表になる。この表により種類ごとに見ていく。

普通作物

普通作物には水田における米と畑作の穀物類・甘藷がある。先ず水稲は田一五六五反で栽培され、二九七四石の収穫高であり、反収は一石九斗であった。二毛作は少なく、二毛作可能が二二五反、二毛作を行っている面積は一三五反のみであった。しかし、都筑郡の二毛作率よりも少し上であった。収穫された米のうち七四パーセントの二一九八石を自家で消費し、残りの七七六石が販売され、価格は一万八〇九六円となった。専業農家一戸当りの自家消費は約四石となり、全部が自家食糧となったとしても同村の平均一戸当り人数の六・三人分には不足し、この分を購入か他の穀物類等で補うこととなる。

畑作の普通作物では、小麦が栽培面積一六三七反と一番多く、収穫の六五パーセントを販売し二万三〇〇〇円の販売額であった。ついで甘藷の販売額が大きく両者で五割を超えている。甘藷も販売割合が六割を超えていた。一方、陸稲・大麦・稗麦は自家消費が六割を超え、水稲と合わせて主食用が多かったと思われる。

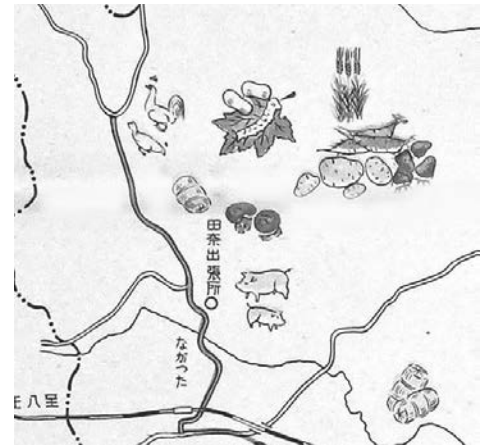


図2「横浜市農産物分布図」の田奈辺り
元図：『横浜市農政概要』昭和十四年版（横浜市産業部）1940年、色刷り附図。米・麦・甘藷・馬鈴薯・苺・柿・養蚕・養鶏・養豚が描かれている。

蔬菜

蔬菜は畑作普通作物と比較して栽培面積が小さく販売額も低い。三五（昭和一〇）年の都筑郡全体では、農産額に占める蔬菜花卉は二割程であるが、田奈・岡上・中里は一割未満で蔬菜花卉の栽培が少ない村であった。一方、郡内では四割弱の新田村や三割強の都岡村など蔬菜花卉栽培が盛んなところもあった（『神奈川県統計書』）。

田奈村では、このように生産額が少なかったが、その中で販売割合が一〇割の苺、九割を超える西瓜といった嗜好品として消費をされるものと豌豆・蚕豆の販売額が高い。

その他、蔬菜分類に入っているイモ類（里芋・馬鈴薯）や大根、茄子、胡瓜が統計に挙がっている。これらは自家消費率が六割から八割と高くなっている。

甘藷や馬鈴薯は、横浜市合併直後は「（市内西北丘陵地帯の）畑地には夏



写真1 田奈の柿「禅寺丸」の共同出荷
出典：『横浜市農政概要』昭和十四年版（横浜市産業部）1940年。

作の陸稲の外甘藷、馬鈴薯等の作付相当に多く、主産地は中和田、瀬谷、田奈地方で其産額多額に昇り、且つ品質は遠く関西、北海道方面に迄知られて居る」と評されている（『横浜市農政概要』一九三九年）。

果樹

果樹では、柿が果樹の販売額の九割を占めており、その価格は小麦や水稻と同等である。しかし、資料には「隔年に付多額を記入す」とあり、この三四年は「当たり年」であったようである。前掲『横浜市農政概要』には、柿は横浜市の特産果実で新市場に多く、品種は禅寺丸と富有が主で、そのうち港北区（旧都筑郡）では禅寺丸が多いと記載されている。

この柿と前出の苺は田奈村出荷組合において共同出荷を行っていた。

養蚕

養蚕は、大多数は春蚕（五〜六月）、初秋蚕（八月）、晩秋蚕（九月）と三回行われ（『続田奈の郷土誌』）、総農家戸数五四五戸のうち七〜九割近い農家が養蚕を行っている。掃立数量は、春蚕二万四二四七グラム、初秋蚕一万四七五〇グラム、晩秋蚕一万二〇五〇グラムで、この収穫量は一万九五三七貫、販売量は一万八二八貫となり、販売額の六万四九三〇円は普通作物を上まわっていた。最初に述べた一九三〇年の生糸価格の暴落、それに伴う繭価の暴落、以後の価格低迷という昭和恐慌期の打撃にもかかわらず、養蚕は田奈村農家の主要産業であった。

この養蚕のための桑園は一五六七反となり、四九万五七七貫の収穫量があった。このほとんどを自家の養蚕に使用していた。

これらの養蚕業の改良等を目的とした養蚕実行組合は、村内に一三組合が組織されて四〇〇戸が加入していた。

畜産

横浜市合併直後を示す図2では、養鶏と養豚が記載されており、市内の産地のひとつと見なされていた。

養豚は五〇〇頭が飼育されており、肉用・子豚として四〇〇頭が販売されていた。この販売額一萬一二〇〇円は蔬菜合計と匹敵している。養豚農家は四六五戸あって、一戸当り一〜二頭の飼育であり、横浜市内飼養頭数の三分

の二を占める農家副業による飼養の標準的な状況であった。これは「飼養者の無智識にして、技術の拙劣により来る損失尠からず」、「種類の改良、飼養管理の点に聊か非難するの憾みあり」と指摘されていた（『横浜市農政概要』）。

養鶏では鶏一〇八〇羽が飼育されており、九三九貫の鶏卵が収穫されている。このうちの九割以上が販売され、一二〇〇円の販売額であった。養鶏戸数の記載は無いが、たとえば長津田では「大正から昭和の日中戦争に入る頃までは、どこの家にも鶏が飼われて」おり、「五、六羽からせいぜい一〇羽どまりで、はなし飼」とあり、農家副業としての養鶏であった（『大正昭和激変の庶民生活史』）。

その他、牛は七〇戸で七五頭が飼養され、肉用として五頭が販売された。「計画書」をみると、「従来運搬用二ノミ使役サル、鮮牛ヲ犁耕並ニ畜力機利用等ニ依リ利用範囲ヲ拡張」とあり、牛は運搬用に主に使われていたことが分かる。また馬を飼養している家もあったようである。

林産

林産品で販売金額が大きいのは木炭があり、三万八四〇〇貫を生産し、自家消費は一萬一二五〇貫、販売は二万九一五〇貫、五四三〇円の販売額であった。

木材では松と杉が販売されており、計約三六〇〇円の販売額であった。竹関係では、横浜市北部が産地の

筍を田奈村でも生産しており、収穫高五〇〇〇貫のうち三五〇〇貫が販売され八七五円の販売額があり、その他、竹材や飾竹が販売されていた。

この他に副業として販売額一五〇〇円の菓細工や芝・茶があった。

以上の農業等の収入（販売額）は合計一八万六四八四円となった。

農業外収入

次に農業外収入を見ていこう。農業外収入は二二万七〇四四円あり農業等の収入を超えていた。

このうち、俸給が九万四二七〇円と四割以上を占めており、商工業純益金二万八四七七円（二・三・一パーセント）、預金利子二万六九九六円（二・二・四パーセント）、小作料二万四〇三三円（二・一・一パーセント）となっていた。

これにより収入合計は四〇万三五二八円となった。

農業関係等支出

農業関係等支出では、先ず金肥が記載されている。金肥は合計四万三三二二貫・三万四四六〇円、一反当り五円五八錢、農家一戸当り六三三三三錢であった。

この内訳は、数量では人糞尿が六五・八パーセントとかなりの量を占め、他は一割未満であった。金額では二八・九パーセントの完全肥料が高く、次いで硫酸一五・二パーセント、糖一四・〇パーセント、過燐酸石灰一〇・三パーセントが一割を超えていた。完全

肥料とは植物の三大栄養素である窒素・燐酸・加里を含んだ多種多様の配合肥料のことである。化学肥料は普及途上であり、コストが低い人糞尿が大量に利用されていた。

租税公課負担では、国県村税三万五三四五円九四錢、その他、農会・農事実行組合・養蚕実行組合の農業関係団体の会費、部落費で計三万七二四九円九四錢であった。

その他生産費として支払小作料一万一三二五円、種苗代二九九〇円、農用薬剤代六五七円、出荷運賃一六二六円、出荷容器代八三六円、農具代修繕代二七一円、飼料代一万二五〇九円、雇人料五八二四円等、計三万九一七三円があった。村全体としては、支払小作料は収入小作料の五割弱であった。

生活費

生活費は支出の七割を占めている。

食費は六万八八一円一二錢で、このうち四割弱が米であった。消費量は一一四八石で、先の自家消費分と合計しても人口一人当り一石に届かない量であった。次いで酒の支出が多い。衣服や小間物類には二万六〇六六円、娯楽（煙草・観劇・玩具・旅行等）に二万二七六〇円、利子支払二万二五二六円、計二四万九四〇七円二〇錢であった。

収支

収入は農業収入一八万六四八四円、農業外収入二二万七〇四四円、

合計四〇万三五二八円、支出は金肥三万四四六〇円、租税公課負担三万七二四九円九四錢、その他生産費三万九一七三元、生活費二四万九四〇七円二〇錢、合計三六万〇二九〇円一四錢であった。この差引は四万三三二七円八六錢となり、一戸当り五八円五九錢の余剰となっている。しかし、これは村内平均の数値であり、土地所有で見たように多くの五反未満層では小作料を支出するばかりとなるなど、その経営は苦しいものとなる。

経済更生計画書

これらの調査を基礎として作成された「経済更生計画書」では、先ず耕地計画として「農業経営上最モ重大ナル関係ヲ有スル」道路改修が取り上げられ、他に河川溝渠改修が計画された。食糧農産物の改善では水稲・陸稲・麦類・柿・蔬菜類（甘藷・西瓜等）の増収を計画、畜産改良では朝鮮牛・豚の増殖、桑蚕改善では桑園や養蚕の改良、その

他、林産品や副業の増産など数々の増産改良を計画し、生活費等の経費削減としては自家用醬油醸造、自給肥料への転換などや、販売統制や物資配給などをを行い、また衣食住などの社会生活改善など経済・生活全般に関わる計画を実行することを目的としていた。これにより一戸当り五九円ほどの収益から九九円ほどにする計画であった。

しかし、計画が樹立されて間もなく横浜市との合併の話となり、合併直前まで反対の意見もあったが、最終的には一九三九年四月一日、新治村等の都筑郡の町村や戸塚町等の鎌倉郡の町村と共に横浜市と合併し、田奈村地域は港北区となった。

【参考文献】

- 『神奈川県史』通史編7（神奈川県）
- 一九八二年、『横浜緑区史』通史編（緑区史刊行委員会）一九九三年、『田奈の郷土誌』（田奈の郷土誌）編集委員会）
- 一九六四年、『続田奈の郷土誌』（続田奈の郷土誌編集委員会）一九六六年。長津田を語る会『大正昭和激変の庶民生活史 長津田のあゆみ』（大明堂）一九七八年。

資料は主に「昭和十年年度指定 経済更生基本調査書」（河原春次資料・横浜市史資料室所蔵）。河原春次は一九三八年二月に田奈村村長となり、翌年一月に退任した（『横浜貿易新報』三十九年一月一二日）。

（百瀬 敏夫）

表3 収支

項目	金額(円)
収入	403,528.00
1. 農業収入	186,484.00
2. 農業以外収入	217,044.00
支出	360,290.14
1. 金肥	34,460.00
2. 租税公課負担	37,249.94
3. その他生産費	39,173.00
4. 生活費	249,407.20
差引	43,237.86
戸数(戸)	738
一戸当り差引	58.59

ボングー洋装店の アルバムから

はじめに

横浜市史資料室では、令和五年度に初めての試みとして、シリーズ展示「横浜の女性と洋装」を企画した。期間中三回の展示会と、市史資料室内展示「横浜の洋装風景」を開催した。

この稿では、展示で新たに紹介した資料のうち、ボングー洋装店の創業者澁谷英行のご子息吉彦氏から借用したアルバムを取りあげたい。また、英行の義妹で店を引き継いだ、勝瀬さゆみ氏から話をうかがった。

ボングー洋装店と澁谷英行のアルバム

ボングー洋装店については、『市史通信』第四五号および第四八号でも紹介している。澁谷英行は、父久吉の仕事の関係で一九一六（大正五）年にバンクーバーで生まれ、七歳の時に日本に来た。そして一九三五（昭和一〇）年に父が経営するシスター洋装店で働く

ようになった。

澁谷は戦時中、四年間徴用された。その間、横浜大空襲で店を失った。シスター洋装店は、一九四六（昭和二一）年に、中区本牧町で再開された。そして、澁谷は一九四九（昭和二四）年に、本郷町一丁目にボングー洋装店を創業し、独立した。

借用したアルバムは、澁谷が一九五六（昭和三一）年九月九日に購入したものである。内容は、一九五三（昭和二八）年六月二八日に紅葉坂の婦人会館で行なわれた、神奈川県洋裁技能者証書授与式の写真二枚と、一九五六（昭和三一）年春から一九五七（昭和三二）年一月までに、主に澁谷が撮影した写真を取めたものである。中判カメラ（6×6）で写された写真は、台紙に横3列、縦2列に貼られていたようだが、多くの写真が失なわれ、几帳面な文字で書きこまれた説明文のみが残されている。当該アルバムの現存写真数は、中判カメラのものが六六枚、その他一五枚の合計八一枚である。

ここでは、アルバムのなかから、一九五六（昭和三一）年八月のボングー洋装店での仕事風景、日本デザイナークラブ（NDC）ショーへの参加作品制作風景、同秋冬ショーのほか、「自動車と服装の総合ファッションショー」参加作品制作風景など二〇点と、合わせて横浜市史料室が所蔵する「自動車と服装の総合ファッションショー」カ

タログの掲載頁と当日撮影された写真の二点を紹介する。

最初の頁は「戦後十一年目の夏の記録」として、一九五六（昭和三一）年八月一九日に撮影された、写真1「長者町一丁目接收地」のカマボコ兵舎の前を交差する女性たちの写真から始まり、続いて「外国車の並ぶ伊勢佐木町入口」など、戦争の影響が残る風景が収められている。そのような中で、復興したボングー洋装店の活動を見ていきたい。

ボングー洋装店での仕事風景

ボングー洋装店は、二階建ての店であった。一階は接客部分と給湯室を含む仕事場、二階は全て仕事場である。紹介する写真は、店の内部を撮影した貴重な資料である。それぞれ説明文が付けられている。写真2「ショーウィンドのマヌカン」、写真3「ショールーム」、写真4「衣裳棚」は、それぞれ一階にあり、接客する場所である。ショーウィンドウ（写真2）は全面ガラス張りで、通りを行く人々からは、ガラス越しに最新流行の服を着せたマネキンが見えた。特に夜は目立ったようである。店の中に入ると、ブラウスなどの陳列棚を備えたショールーム（写真3）である。奥には衣裳棚（写真4）を設けており、手前には様々な色や柄の布が、立てかけられている。右奥には、ドレスが何着かかかっているが、L字型にカーテンを引くと、仮



写真1 長者町一丁目接收地（戦後十一年目の夏の記録）
以下、写真20まで澁谷吉彦氏所蔵（説明文はアルバムの通り）



写真4 衣裳棚



写真3 ショールーム



写真2 ショーウィンドのマヌカン



写真7 ミシン掛

写真8は、場台の左右から、三人がかりのアイロン掛け作業である。左手前と右側の二人が、アイロンを手にかけている。アイロン台は用途によって、複数の種類があった。展示では、勝瀬氏から小型のアイ



写真6 裁縫室

ロン台を借用して紹介し、好評だった。「二枚袖用のアイロン台」、「袖山用のアイロン台」、毛足の長い織物用の「ニードルボード」である。この頃、店では一六人位の女性たちが、働いていたということである。



写真5 裁断室

縫いの場所になった。写真5から写真10までは、裁縫師たちの仕事場である。接客の場所と分けて、客に仕事場の雰囲気を感じさせないようにしているのだろう。一階奥には写真5「裁断室」と写真6「裁縫室」があった。明るい裁断室の壁面には、参考にするためのファッション雑誌の切り抜きや、スケジュール表などが貼られている。大きな台（勝瀬氏によると、「場台」）には、裁断前の布地が広げられている。裁縫室は二人が作業できるほどの広さで、場台とブラザー・ミシンが置かれている。澁谷は、ここで作業をしたらしい。

写真7「ミシン掛」と写真8「アイロン仕上」は、二階の仕事場である。大きな部屋には、ミシンとアイロンがそれぞれ置かれていた。写真7では、窓に向けてミシンが並んでいる。ミシンは、家庭用（ブラザー・ミシンとシンガー・ミシン）三台、職業用（通称103ミシン）二台、布の縁をかがるためのロックミシン一台の、全部で六台であった。写真の右はじにアイロンが写っているが、部屋の中央にはアイロン台が置かれていた。



写真8 アイロン仕上



写真10 (プリーツ作成)



写真9 制作中 (NDC出品)

写真9と写真10は、ドレスを制作しているところである。写真9はドレス上部の制作過程で、澁谷と裁縫師が楽しそうに作業をしている様子が見られる。細かいひだのあるスカートは、扱いに苦労したというが、写真10はスカートのプリーツを制作しているところである。このほか、アルバムには、ベチコートを縫っている場面の写真も見られる。



写真13 サルビヤ色のドレス



写真12 仮縫スナップ



写真11 採寸中

ショーの四日前の九月二六日に、伊東が澁谷の自宅を訪れ、ドレスの仮縫いを行なった。写真11と写真12は、その時のものである。確認のためなのか写真11は採寸中のもので、写真12は仮縫いの様子である。この作業は、澁谷夫妻と勝瀬氏、もう一人の裁縫師が行なった。『市史通信』第四八号でもこの場面を紹介したが、掲載した写真は、それらの人々が、ほぼ完成したドレスを着るモデルに、見とれている様子であった。

日本デザイナークラブ秋冬ショー

日本デザイナークラブ秋冬ショーは、九月三〇日に、東京会館で開催された。写真13は、ショーの当日に撮影したものである。メイクをして服装を整えると、モデルは別人のように見違えた。

写真14は、当日の受付の様子で、中央に澁谷が立っている。プログラムは、一部百円で販売していた。当日券も販売しており、指定席と一般席があったようだが、金額は不明である。スポンサーだろうか、ワコーのランジェリーの見本、レナウンの生地見本などが後ろに並んでいる。

澁谷はショーの合間に、写真を撮影した。写真15はショーの舞台である。豪華なシャンデリアが光る中、モデルがランウェイを歩いている。写真16は、山脇敏子の作品で、裾に大きな花模様を配した、イブニングドレスである。山脇は、一九二九(昭和四)年に「山脇洋裁学院」(現在は、

山脇美術専門学校)を開設した、日本のファッションデザイナーの草分け的な存在で、日本デザイナークラブの顧問をつとめていた。ショーでは、そういったデザイナーの作品を、間近で見れる事もできた。

澁谷は、楽屋でのモデルへの着付けから、舞台上上がるまでを記録している。写真17は、出演前に鏡の前で、モデルが衣裳の確認をしているところである。そして、写真18は舞台上上がったモデルである。後ろの客席にいる観客たちの視線が、集まっている。

作品展の作品は、モデルに合わせて作成するため、作品展終了後はモデルが気に入れば買い取られたが、店で保管することが多かったらしい。写真19は、クリスマスで賑わう一二月に、ボングー洋装店のショーウィンドウを飾る、真紅のイブニングドレスである。横浜市史料室の展示会では、一九五四(昭和二九)年の日本デザイナークラブ作品展に、澁谷が出品した作品(ツーピース)を借用し、展示した。ウエストが、かなり細く作られていた。

「自動車と服装の総合ファッションショウ」の作品制作

「自動車と服装の総合ファッションショウ」が、一九五六(昭和三一)年一〇月に開かれた。写真21は横浜市史料室に寄贈されたカタログの表紙で、写真22はカタログに掲載された澁谷の作品である。モデ



写真16 山脇敏子作品



写真15 NDCショー(舞台)



写真14 NDCショー当日



写真19 ショーウインドウ

澁谷の作品は、若い女性に十月の街着や旅行着として用いられるのを目的に作られた、ローズマダー色のツイードのスーツである。写真20は制作風景で、ポデイーに着せられた

それぞれ紹介された。
「自動車と服装の総合ファッションショー」は、日本デザインナークラブショーの翌月一〇月一五日・一六日に、日刊自動車新聞社・日本デザインナークラブ・じゃがいもかい(テーラーのクラブ)主催で、日比谷の東京東宝劇場で開催された。



写真18 NDCショー (伊東絹子)

一九二九(昭和四)年に創刊した『日刊自動車新聞』が六千号を迎えるのを機に、進歩向上した国産乗用車と世界の乗用車の粋を一堂に集め、服装との総合的な近代美を觀賞してもらおうという企画であった。じゃがいもかいは、会長上原種次郎によると「数年来日本の紳士服ファッション・ショウをリードして来た一流のカストム・テーラーのクラブ」だということである。

自動車と日本デザインナークラブによる女性ファッション、じゃがいもかいによる男性ファッションの組み合わせでショーが開かれた。南道郎、E・H・エリック等が司会をつとめ、越路吹雪、岡田茉莉子、宝田明等が歌手として出演し、原信夫とシャープ&フラッツが演奏した。三〇台の自動車と女性と男性の作品が、それぞれ紹介された。



写真17 鏡の前

ジャケットを、裁縫師たちが見ているところである。活動的なスーツに仕上がった。
「おわりに」
一九五六(昭和三一)年は、紹介した二つのファッションショー以前にも春頃に企画があり、澁谷にとって活動的な一年であったようだ。日本デザインナークラブは、毎年二回のファッションショーを開催している。澁谷は春夏のファッションショーにも出品したかも知れない。また、澁谷が所属する横浜洋装連盟のファッションショーも春に行なわれ、作品を出品した。同連盟は、三月三十一日街頭ファッションショーを、翌四月一日には、神奈川県立音楽堂での春夏ファッションショーを開催した。ファッションショーには、生地商社などがスポンサーとなり、参加者と主催者を支えた。

この年七月の経済白書で、日本政府は「もはや戦後ではない」と宣言した。戦後一一年目で、横浜はまだ廃墟が残る街並みであったが、澁谷のアルバムに写された人たちからは、希望に満ちた時代が感じられる。

貴重な資料の掲載をご許可いただいた澁谷吉彦様、ご協力いただきました勝瀬さゆみ様に感謝いたします。

(上田 由美)



写真22 「自動車と服装の総合ファッションショー」出品作
横浜市史資料室所蔵 ボンゲー洋装店資料



写真21 「自動車と服装の総合ファッションショー」カタログ掲載頁
横浜市史資料室所蔵 ボンゲー洋装店資料



写真20 自動車ショー出品作制作中

閲覧資料紹介
『愛称道路』横浜市道路局
一九七八(昭和五三)年、八四(同五九)年

道路は管理する行政の主体によって、国道・県道・市道などに分けられ、番号を用いて「〇号(線)」と呼称されるのが一般的である。国道一号は東海道路で、横須賀街道と八王子街道は国道一六号の一部であるなど、主要な国道であれば、番号から道路の地理を想起することが容易だが、県道や市道では、例えば、綱島街道が神奈川県道二号であるなど、すぐには想起できない。

道路名称のわかりにくさは近年に始まった問題ではなく、横浜市道路局ではおよそ半世紀前の一九七六(昭和五一)年度より、対象は市道がほとんどだが、坂も含めて道路、街路に愛称を付ける事業を行っている。通称によるもの、市民から新たに提案されたものも含め、その成果をまとめたのが冒頭に掲げた冊子である(*一九七八年に初版、一九八四年に増補再版)。その「はしがき」には、問題意識が明快に記されているので、ここに引用しておく。

〔前略〕道路には、行政上の番号や名称がつけられていますが、一部を除き、一般に知られていないため、市民にとってはなじみがなく、また、複雑多岐な道路網から利用者にとって、も分かりにくいものになっています。〔中略〕従来からその土地に因んだ道路の通称が愛称されている場合があり、それ等は、その道路の経てきた沿革とか、その沿道の特徴を簡明に言い表わし、その地域と一体となつて親しまれているもの、あるいは、

到着地点や方向を簡潔に示し、道路の機能的な働きをしているもの等が多く見受けられます。

次に本文の内容を紹介しておこう。例えば、当室の所在する野毛山地区周辺で呼称される「野毛坂」「動物園通り」「新横浜通り」について、左記のような解説がなされている(*記述の体裁は若干変更した)。

野毛坂 中区野毛三丁目〇〇西区老松町(延長三五〇メートル)、市道
この坂は、市立図書館を経て野毛動物園の方へ上がっていく道であるが、本来は伊勢町から日の出町の間にある切通しを称していたともいわれている。

動物園通り 中区野毛町三丁目〇〇区花咲町二丁目(延長二〇〇メートル)、市道
桜木町から野毛山動物園への近道で、しかも自動車の通過量が少ない故か、家族連れ等が多く通行することから、昭和二〇年代に動物園通りという呼称が生じた。

新横浜通り 中区扇町一丁目〇〇神奈川区三枚町(延長二五〇メートル)、市道
都市計画道路 山下長津田線、同三ツ沢鳥山線

これらはあくまでも愛称だが、現在では民間地図で使用されたり、現地に標示板が設置されるなどしている。坂も含め道路の名称が、地名の一種として、調査研究の対象に盛り取り上げられることを期待したい。
*当室では本書の複製を閲覧することができる。

(岡田 直)

《市史資料室たより》

【令和6年度横浜市史資料室室内展示】

◆「横浜観光と野毛山」(仮)

会 期：4月下旬～7月上旬
時 間：午前9時30分～午後5時
◎入場無料
会 場：横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館地下1階
横浜市史資料室
休室日：毎週日曜日及び横浜市中央図書館休館日

【新刊紹介】 各500円(税込)

『横浜市史資料室報告書 令和五年度 戦前・戦中期横浜の小学校―震災と戦争のはざままで―』

〈目次〉【第1部 通史編】第1章 学校制度のはじまり／第2章 震災と教育の復興／第3章 小学校の日常生活／第4章 戦時下の学校教育／第5章 写真からみる学校生活／第6章 綴り方作品からみる子どもの日常【第2部 「校報」にみる時代の転換点】第7章 関東大震災／第8章 満州事変／第9章 日中戦争／第10章 アジア太平洋戦争

横浜市史資料室 紀要 第14号

〈目次〉高度成長期における横浜駅周辺の変容について～商工資料を中心とした考察／『令女界』読者グループ「R.J.R.令女純情連盟」横浜支部について／陳情書に見る横浜市の震

災復興土地画整理事業―第九地区の事例―
／資料紹介 都市横浜の兵士の記録を読み解く／横浜市史資料室の活動記録／資料を寄贈していただいた方々／
横浜市史資料室の刊行物は、横浜市役所市政刊行物・グッズ販売コーナーで販売しています。



【寄贈資料】

- 1 長沢博幸様
後藤家資料一式 34件
- 2 土志田三津夫様
田奈部隊インタビュー 話者土志田郁子 1件
- 3 横山純也様
横山家資料 22,748件
- 4 横田都様
横田晴江家資料 35件
- 5 永田恵子様
絵葉書帖(開港五十年記念等) 1件

【展示会 横浜の女性と洋装 が終了しました。】

- ◆「スマートな洋装 横浜のモダンガール」
令和5年11/18～11/30 入場者数730人
- ◆「戦中・戦後の横浜の女性とファッション」
令和5年12/13～12/23 入場者数630人
- ◆「洋裁ブームと横浜の洋装店」
令和6年1/20～1/31 入場者数679人

3回シリーズで横浜の女性たちが洋装を取り入れていく姿を紹介しました。
展示会アンケートでは、「横浜の文化を洋服を通して知る事ができた」、「資料室内のファッションショー写真が貼られた壁面は、自分もファッションショーを見ているようで面白い展示方法だった」、実物の洋服等を見て「手仕事の技術に感動した」などの感想がありました。

●講座「ハマのモダンガール―震災復興と戦争のはざままで」(11/23, 44人参加)では、「レジュメやスライドを通じて大正末期から昭和戦前期にかけての横浜市民の生活風俗(服装)について詳しく知る事ができ勉強になった」という感想がありました。

●講演会「山手の服飾文化を支えた『ボンゲー洋装店』」(1/27, 62人参加)では、「地域資源の掘り起こすことの大切さを感じた」、「検索で出てこないウンチクも面白かった」と書かれていたアンケートもあり、講演会を楽しんでいた様子です。

* 講座、講演会および展示解説の様子は、YouTubeチャンネルにアップ予定です。